

## 研究ノート

## Prep の現地視察による現状と可能性

Current status and potential of Prep site visits

太田 誠\*, 橋本隆公\*\*, 亀岡正睦\*\*\*, 小西豊文\*\*\*\*

Makoto OTA, Takahiro HASHIMOTO, Masayoshi KAMEOKA, Toyohumi KONISHI

キーワード：Prep, 就学前教育, 現地視察

Key Words：Prep, Preschool education, Site visit

## 要約

オーストラリアでは小学校へ入学する前年度の準備教育を Prep と位置づけ、義務教育を進めてきている。日本でいう保育所・幼稚園の年長にあたる年齢から、義務教育化してまで就学前教育に取り組む意義は何なのか。そこで、実際にオーストラリアのケアンズにおいて複数の現地視察を行い、その現状と可能性を探ることを目的とした。また、そのことから日本の就学前教育の在り方に新たな指針をもつことができるのではないかと考えた。

## Abstract

In Australia, five-year-old children before entering elementary school are positioned in a Prep and have been put into compulsory education. What is the significance of working on early education from the age of a nursery school or kindergarten in Japan to the compulsory education? The purpose of this study was to conduct multiple field visits in Cairns, Australia, and to explore the current status and possibilities. In addition, I thought that by doing so, I could develop a new guideline for Japanese preschool education.

## 1. はじめに

日本の子どもたちにとって、保育所・幼稚園での教育から小学生となっていく教育には大きなギャップがあり、日本の教育現場でも長年の課題となっている。その一助として、新学習指導要領に合わせたスタートカリキュラムを、小学1年生の全教科、領域で合法的・関連的に指導しよ

---

\* 東海学園大学教育学部 \*\* 大阪成蹊大学教育学部 \*\*\* 京都文教大学臨床心理学部

\*\*\*\* 元甲南女子大学人間科学部

うとしている。しかし、それはあくまでも6歳児である小学校1年生に対する対策であり、それ以前の5歳児を対象とした就学前教育の在り方は模索の中にある。

一方、オーストラリアでは、小学校へ入学する前年度の就学前準備教育（以下、Prepとする）を位置づけ、州によって差異はあるが義務教育化を進めている。5歳児に義務教育を行うことで6歳児へのギャップは軽減されるかもしれないが、単に前倒しをした早期教育になっているだけであれば、意義のある教育となっているのだろうか、疑問が湧いてくる。そこで、実際にオーストラリアのケアンズに出向いて複数の現地視察を行い、その現状と可能性を探ってみたいと考えた。また、そうすることで日本の就学前教育の在り方に、新たな指針をもつことができるのではないかと考えた。

## 2. 研究の目的と方法

タイプの違う3つの学校（園）の視察と算数教育の指導的立場にある実践家との対談を通して、直接見聞きし感じたPrepの現状と可能性を整理し、日本の就学前教育に生かせるプログラム開発の指針にすることを目的とする。

具体的な方法としては、以下の3つの視察と1つの対談を実行し、その都度共同研究者のメンバーで直接見聞きした事実を記録し共有していく。その記録をもとにPrepの現状と可能性を整理し、日本の就学前教育に生かせるプログラム開発について議論を深めていく。

- ・ Butterflies Early Learning Centre・・・Prepの前の2歳半から5歳の年代まで
- ・ St Gerard Majella Primary (SGM)の視察・・・Prepから小学6年生の年代まで
- ・ St Andrew's Catholic Collegeの視察・・・Prepから高校までの一貫校
- ・ Neville Simpson 夫妻との対談・・・算数教育の指導的立場であり実践家

## 3. 視察の実際

(1) Butterflies Early Learning Centre・・・Prepの前の2歳半から5歳の年代まで

### ① I Sand Box（砂場の学習装置）について

デジタルで遊ぶI Sand Boxという砂場の学習装置が特に目を引いた。16種類のプログラムが選べるようになっている。その場に来た子どもたちは、どの子どもも夢中になって取り組んでいた。

### ② Kindy（幼稚園）の制度について

3歳半から5歳までの子どもをKindyとして預かっている。その下の年代は保育となり、この園では15ヶ月から対象となる。他



図1 I Sand Box

の園では、6ヶ月から預かっているところもあるようだ。Kindy のプログラムは本来4歳児を対象としたものだが、3歳半から5歳までの子どもに適応している。また、色、形、数、名前の頭文字等が判別できることを目的としている。

Kindy の学びの段階としては、次のような3段階のステップがある。

- 第1段階：Concrete（コンクリート）・・・手や体で触れながら学べるもの
- 第2段階：Pictoria（ピクトリア）・・・目で見て視覚的に学べるもの
- 第3段階：Abstract（アブストラクト）・・・抽象的な扱いにして学ぶもの

### ③ 一斉授業での活動例

テーブルに番号のカードを置いて、自分の番号に座らせる練習をしていた。わからない子には、その番号を見せて、同じ番号を探させていた。この日の一斉授業では、カーペットのような床に数字（恐らく消せる）を書き込み、子どもたちを座らせていた。全員が番号通り座ることができた後、子どもの肩を触って「ワン」「ツー」「スリー」・・・とみんなで数えながら、ゆっくりと円を一回りしていた。



図2 一斉授業での活動の様子

ピクトリアルカード（色のついた●や▲等が描かれたカード）を使って、答えさせる練習があった。この日の一斉授業では、18枚のカードを裏返しておいて、一人ずつカードを選ばせていた。そして、そのカードの中にある形や色を答えさせていた。わからない子どもには伝えていた。

絵本を見せて、その中で形や大小等を認識させることも重視しているようだった。参考図書としてイギリスの童話である『Goldilocks Three Bears（ゴルディロックと3匹のくま）』を紹介してもらった。

### ④ その他

Kindy の教育を進めるにあたっては、「Early Year Framework」という国で定められた基準がある。

観察（Observation）の記録を取っている。例として「平均台に乗れなかった子どもが、・・・に乗れるようになった」等。

子どもの成長過程の個人差は大きい。したがって、個々の成長に応じた教育・支援が必要であると思われる。子どもたちのやりたいことに沿って支援していくのが教員・保育士の仕事である。子どもたちがこの先辿っていく教育や職業には、多様性が大いに認められることが大事であると強調されていた。

## (2) St Gerard Majella Primary (SGM)・・・Prep から小学6年生の年代まで

### ① 教員間の打ち合わせ

同じ学年を受け持つ教員同士で、必ず打ち合わせを行う時間が確保されている。3年生58名の場合、2つのクラスがあり、2名の担任と1名の学年サポートがいる。サポート役の教員は、障害や発達に遅れがある児童を中心にサポートしている。サポート役の教員は、特別支援のライセンスはないが、通常の教員免許を持っている。一人一人の子どもによって、できることとできないことが違うことを認識して、子どもたちと関わっている。

### ② 図書館・プログラミング学習

図書館では、子どもたちが読みたくなるような本を揃えている。Prepの子どもたちも、自分で借りた本は自分で籠に返すようになっている。クラスで同じ本をまとめ借りしやすい環境も整えている。

3年生から一人1台iPadを持って、プログラミング学習を行っている。プログラミング学習は、6年前から行って、今ではSpirou, Bi-pottu, Dashという3つのプログラミング教材を扱っている。中でも、Spirouには専用のアプリがあり、Prepから6年生まで、学年に応じたデジタルプログラムのカリキュラムを備えている。



図3 プログラミング教材 Dash

### ③ 科学の祭典

1年に1回、科学の祭典が行われている。

ちょうど視察の日が科学の祭典であった。マルチパーパスホールという野外屋根付きの多目的ホールで行われる。Prepから2年生は午前中に行い、3年生から6年生は午後に行く。ブースは6種類あり、時間を区切ってローテーションで全てを回る。Prepの子どもたちにとっては、上の学年の子たちと同じ空間で学ぶよい機会となる。セキュリティのために、マルチパーパスホールをはじめ、学校の敷地内に14か所カメラが設置されている。

### ④ 算数の授業に関して

九九は日本と同じ2年生で習うが、2年生の間に是が非でも習得させるという意識は低いため、5,6年生になっても習得困難な子どもは少なからずいるとのことである。1つの教室内に4つのタスクがあり、順番に回って全てのタスクを経験させている。ただし、同じタスクでも、小集団のレベルに応じて求めるものを変えている。1時間の授業内では、全員一緒に同じことを習う時間帯もある。先生たちは子ども一人一人のチェックリストを持っていて、1週間ごとに小テスト(アセスメント)を行い、個々のレベルを把握している。

### ⑤ Preschool について

Prep が始まる前は、Preschool という制度があり、もっと早い年代から入学者を受け入れていた。ただし週に3日間しかなく、その3日間でさえ来ない子どももいたので、きちんとしたルーティンがなかなか確立できなかった。また、個人差がとても大きく、十分なことができなかったようだ。その Preschool は 2006 年に廃止され、2007 年から Prep が始まった。Preschool には、国のカリキュラムがなかった。

### ⑥ Prep の制度について

オーストラリアの学期日程は、1 月末に始まって 12 月末で終わり、全部で 4 つの学期 (term) に分かれている。学齢は、7 月 1 日から 6 月 30 日を同学年とする。ターム 1 は 10 週間で、ターム 4 は小学校に向けての準備となる。Prep が始まって以来、子どもの受け入れや教員の確保は徐々にできていった。この学校の来年度の Prep 入学者数は 40 人 (男女 20 人ずつ) で、既に埋まってしまっている。しかも、100 人がウェイティングリストに載っている状態である。

Prep の教科の領域は次の 10 の分野に分かれている。

「算数」「英語」「科学」「歴史・物理」「言語 (日本語)」「デジタルテクノロジー」「宗教」「体育」「生活」「音楽・ドラマ・美術・メディア・ダンス」

Prep ではプレイベース (活動を原則にする) を取り入れながら、小学校の学びに繋げていく。1 日の中で、必ず 45 分間の遊びの時間を設けている。Prep が始まった当初は、テスト期間であった。その間、Prep に行かなかった子は小学校で苦労している傾向があったため、2013 年から順次義務教育になっていった。だが、州ごとに進めてきているので、義務教育の進行具合は 8 割程である。義務教育化が遅れているのは、クイーンズランド州の一部である。



図4 個別、グループを中心とした授業

Prep のターム 1 が始まる頃の問題点は、椅子にきちんと座ってられない子どもが多いことである。幼稚園とのギャップを少しでも埋めるために、幼稚園と年間で 4 回交流をしている。その上で、Prep の 1 学期は、学校を好きになってもらうことを大切にしている。

ターム 1 からターム 4 に向けては、当初アクティビティ、プレイベースの時間を多くしていて、徐々に減らしている。小学校と比べて、Prep には遊び感覚のものが多い。この学校の 1 コマあたりの授業時間は 60 分である。冒頭は、音楽を流したり声かけをしたりして馴染ませる時間に行っている。皆で一斉に行う授業時間は 20 分程度。後は、アクティビティ重視の時間となる。

日本の学校の「朝の学習」や「朝の会」に相当する「モーニングルーティン」というものが毎

朝ある。その日ごと、週ごとでトピックを決めて、主にパワーポイントで進行しているようである。

Prep では、算数を教科横断的に学ぶこともあるが、算数と英語のみは、あくまでもその教科のコンテンツを中心に扱っていく。ただし、この学校では、算数の教科書はほとんど使わない。カリキュラムは決まっているが、行う内容は自分たちで決めて進めている。しかし、教科書に代わるプリントを準備して授業をするというわけではない。実際に何かを触ったり活動したりして学ぶことが多い。Prep の授業の assessment (評価) は、宿題や授業の活動の様子等から判断してつけている。

Prep のターム4が終わるまでに、算数では1から20までの数を理解し使いこなせることを目指している。それが、次の1年生への foundation (基礎) となっていく。因みに、1年生の算数で扱う数は、100までの数を数えたり、50までの数の計算をしたりする。算数の授業の主な流れは、「全体指導」「活動」「まとめ」の3段階である。「全体指導」では、電子黒板等を使って、教員が中心となって学習を進めていく。「活動」では、上・中・低位の子たちに合わせて個々や小グループで活動していく。「まとめ」では、再び全員が電子黒板の前に集まり、一人ずつホワイトボードを使って、先生から出された1問の問題を解いて確認していく。

Prep の子どもたちは、ハサミやのりがきちんと使えない。紙も1枚ずつ渡さないと、まとめて切ってしまう子どもがいる。ターム4には、体験入学としてパンプアップデーが1日だけある。次の学年に1日だけ体験入学することができる。子どもたちの座席は、資質・能力によって時間ごとに決まっている。自分で進めていける子どもたちは後方に、支援をして伸ばしたい子どもたちは真ん中に、個別に支援が必要な子どもたちは前方に配置されている。

Prep の教室は必ず2人の教員がつく。資格を持つ教員1名と補助の教員が1名。Prep を担当している他の学校の先生たちと会って、情報共有することが度々ある。課題としては、同じ教材を翌年も使うことがなかったので、実態に合わせて新たな教材を作成していくことが大変であったとのことであった。授業についていけない子どもたちを把握するために、1週間に1回は学年ごとにミーティングを行い、情報を共有している。

評価方法は、1週間ごとや学期 (term) ごとに変えていき、それに合わせて座席も変えていく。座席は教科によっても変わっていく。どの教科であっても、自分で学習を進めていける子どもは後方の座席になる。

#### ⑦ 調査者からの質問と調査協力者からの回答

・1時間(60分)の中で行っていることが多いように思うが、これだけ行わないとPrepの求めているものをこなせないのか？

→普段はもう少しゆっくり進めている。今日は参観者が来られるということで、行うことを詰め込み過ぎた。

- ・数の書き順等は、特に指導しないのか？  
→ Prep の1学期に指導はしている。また、モーニングルーティンの中でも扱うことがある。  
しかし、Prep の4学期が終わるまでに身につけばよいと考えている。
- ・我々（視察グループ）としては、1年生の内容を Prep で先取りするのではなく、もっと体験的な素地を大事にしたいと考えているがどう思うか？  
→ Prep で行っている授業は、1年生につながっていると思っている。
- ・数をすぐに式へ移行してしまい、ブロック操作等の活動が十分ではなかった。また、全体の場で数を数えたりするのも教員が行っていたが、そのようなことはあまり重視していないのか？  
→ 子どもたちに頼るというよりも、教師が進んでリードしていかないと、教材が生かせないからである。
- ・Prep の1学期では、具体的にどんなアクティビティを行っているのか？  
→ 1から5の数でできるゲーム、数が含まれた歌、粘土や工作で番号を作成、さいころをころがしていくつになったか、フラッシュカード等。

### (3) St Andrew's Catholic College・・・Prep から高校までの一貫校

#### ① 学校の体制

Prep から小学5年生までが小学校部、小学6年生から中学3年生までが中学校部、高校1年生から高校3年生が高校部と分かれている。

ダンス・音楽には力を入れていて、高校1年生までは全員が必修で、その後は選択となる。ジュニアの段階から外国語として日本語を学んでいる。中学の段階から日本語、中国語、フランス語、イタリア語の選択となる。

#### ② Prep について

Prep の子どもたちは、安全上運動場に出てはいけないことになっている。小学1年生から出てもよい。Prep が義務教育になる前から、5歳児のクラスを設けていた。Prep の子どもたちは、1週間に1度はクラスで図書館に出向き、本に親しむようにしている。

Prep と小学1年生では、算数の種 (Mathseeds) というプログラムを使っている。これは、ABCテレビ局 (日本でいうNHKのようなもの) が作成しているプログラムの権利を得て使っている。オーストラリアのカリキュラムに基づいて作成されたプログラムなので、十分に授業の中に組み込んで扱うことができる。また、パスワードがあればどこでもログインできるので、家でも親と一緒に学ぶことができる。

1クラスに2人の先生がついている。その内1人はアシスタントティーチャーである。授業時間は Prep から高校まで全て40分。しかし、高校などは40分をダブルで組むこともある。算数に関する用語は重要なので、ファイルに整理して、指導しやすくしている。

### ③ 調査者からの質問と調査協力者からの回答

- ・Prepを導入したことによって、小学校、中学校の内容を下の学年に落として難しくしているようなことはないのか？
  - ケアンズではプレイベースでやっているが、Prepが義務教育になったことで難しくなっている。難しい内容が、下に下にと下がってきている。算数は重要な教科なので、高いレベルを維持していけるように、多くの教材を準備している。しかし、iPadを頻繁に使用しているためか、子ども相互の交流が弱まっているように感じる。
- ・授業時間についての国の定めはあるのか？
  - 60分のところもあれば40分のところもある。本校は40分であるが、ベル等は鳴らない。国で定められている算数の時間は、1週間で5時間(300分)。よって、40分の授業時間なら1週間で7.5コマ行う必要がある。
- ・教科書を使わないのはどうしてか？教科書は頼りにならないのか？
  - 教科書(テキストブック)を使うと、それをこなすことだけに追われて十分なことができない。また、先生たちが怠けてしまう。
- ・上の学年でも教科書を使わないのか？家庭学習はどうなっているのか？
  - 小学6年生までは基本的に使わない。中学1年生からは使うようにしている。宿題はあまり出さないが、本を家に持ち帰らせて読書だけは奨励している。算数については、Mathleticsというオンラインで勉強ができるシステムが使えるようにパスワードとユーザー名を与えているので、家庭に任せている。プログラムがどこまで進んでいるのかは学校でも確認することができる。小学2年生からは、どんどん進んでいくと報酬として、Live Mathletics(世界中のユーザーと対戦できるゲーム)にログインできるようになり、ゲーム感覚で楽しんで学んでいる。
- ・Mathseedsで、一番大事にしているポイントは何か？
  - パターンと数字が結びつくようにすることが大事。今日の授業では、数字と名前とドットのパターンが結びつくこと。また、量のセンス(感覚)も磨きたい。オーストラリアのカリキュラムを実行していくためには、どんな教材があればいいだろうといつも考えている。
- ・Prepの年代にあたる教科書や絵本を作ろうとしているのだが？
  - 種から育てていくという言葉がよい。Mathseedsのプログラムを見ていただくと参考になることが数多くある。
- ・絵本に言葉が載っていてもいいのか？
  - 算数の用語集を見ていただいたように、親が使ったときでもわかるように、ある程度説明する言葉はあった方がいいのではないか。
- ・以前クロスカリキュラムの授業を見たことがあるが、今でも行っているのか？



→クロスカリキュラムのアイデアが好きで、今でも行っている。実際の生活に密着しているものをベースにして、全ての教科を繋げていきたいと考えている。これをやりなさいというタスクを提供すると、やってみようとはするが、それを活用してみようというところまではいかないなので、教師がつなげてあげる必要がある。

#### (4) Neville Simpson 夫妻との対談・・・算数教育の指導的立場であり実践家

##### ① Simpson 夫妻について

Simpson 夫妻は、2人共40年以上の教員経験があり、教員としての定年を迎えた後も、算数の教え方のプログラムを現場の教員に指導している。算数を学ぶ上での障害の手助けや早期教育に関心がある。以前は、算数・数学の得意な子どもを対象に指導したり、時にはキャンプを行ったりしていた。イギリスのロンドン大学の調査によって完成した『DYSCALCULIA ASSESSMENT』(2010)という本を頼りにしている。この本は、ロンドン大学のブライアン先生の20年分の調査がもとになっている。

##### ② 調査者からの質問と調査協力者からの回答

- ・日本の学習指導要領は、「操作」→「思考」→「操作と思考の融合」と変遷してきているが、どう思うか？
  - 日本のその融合は正しい。しかしながら、必ず手で触るコンクリートが大事である。歌に合わせて学ばせることもよい。また、サブタイジング (Subitizing) は見て学ぶことであるが、見たものと数字が結びつくように、瞬間的に見てわかるようにすることが必要である。同じ見て学ぶピクトリアとは少し様相が異なる。数に障害のある子どもは、感覚的に覚えてしまう方がよい。
- ・参観した Prep では、小学校の先取りをしているように見えたが、実際はどうか？
  - Prep の今のカリキュラムは難しいと感じている。コンクリートにもっと時間を費やすべきだ。感覚として覚えさせていけば、その後の授業にもついていける。それがないと、穴が開いたままの状態に詰め込まれてしまう、数の10まででいいので、子どもたちが感覚としてわかっていることが大切である。おはじき等もいいが、直接バナナやリンゴを数えたり、外に出て葉っぱを数えたりすることが大切である。
- ・日本では小学校1年生にスタートカリキュラムが数時間入っている。オーストラリアでは、Prep が導入する前にそのようなものがあったのか？
  - Preschool で行っていた。しかし、政府が介入して Prep となり、遊びの要素が薄れてしまった。
- ・数年前にキャンベラで、教科と教科をクロスするような授業が行われていたが、現状はどうか？
  - 算数や英語では、そのコンテンツを教えることに特化していることが多い。しかし、行って

いきたい。

・現状の小学校の授業に関する不満はあるか？

→やはり手で触って学ぶようなコンクリートが大事だと思うが、テクノロジーが優先されて弊害を生んでいるのではないか。特に、プロジェクター（電子黒板）を使って授業をすることが多いが、それが本当に子どもを育てる教育になっているのか。先生が結局操作してしまっている。教育にはリレーションシップが必要である。0年生の教科書を作る上では、ぜひとも子どもと親がリレーションシップを大切に、親子で一緒に学べる教科書がよいのではないか。

### ③ その他の提言

従来の小学校としてのカリキュラムがPrepに入ってしまった。ファンデーションがPrepの役割のはずだが、ファンデーションなしで詰め込まれてしまっている。それは政府の問題でもある。

Prepの授業は60分だと長すぎる。実際には20分くらいしか集中力は持たない。せめて45分が限界ではないか。

ギャップを埋める1つのアクティビティとして、実物のお金を使うこともある。おはじきやさいころ等を使ったアクティビティは、Prepのターム1から取り入れていくとよい。

Prepの年代にあたる教科書を作成するとしたら、教師が主となって進めるものなのか、子どもたちが主となって進めるものなのか。ぜひ子どもたちのものであってほしい。また、あらゆる教材（付録として）を教科書に盛り込んでしまうと分厚くなってしまうので、ベースとなる記述だけでもよい。それをもとに、いろいろなコンクリートを行っていけばよい。教材は、身の回りのものを大いに使う。その教科書をもとに、子どもたちが自分の本（ノート）を作れるようになっていけるとよいのではないか。

Prepで行われる授業は、先生が教えるというより、子どもたちに気づかせて、それを表現し分かち合うこと。それぞれのパーツ（コンテンツ）がありつつ、それらが全体のストーリーになっているようなものが理想である。

先生や親が興味あるものではなく、子ども自身が興味あるものを扱うようにする。せめて、子どもが選択できる余地があること。

学び終わった後にチェックリストがあるとよい。Prepの年代にあたる教科書の中にも、チェックリストがあってもよいのではないか。Prepの年代にあたる教科書は、原則保護者のもとで進めていくものなので、チェックリストがあると母子手帳のような役割を担うのではないか。さらに、それを小学1年生の担当の先生に引き継げるとよい。

#### 4. まとめ

タイプの違う3つの学校(園)の視察と算数教育の実践家である先生との対談を通して、Prepを価値ある教育にするためのアイデアを数多く知ることができた。その中でも、5歳児にあたるPrepだけを切り離して考えることは難しいことがよくわかった。Prepの前の年代や次の年代である小学1年生以降との繋がりが大事になってくる。それを見据えて、オーストラリア全体でPrepの教育を推進していこうとする取り組みは、我々の今後の研究に生かせる点が多かった。今回視察した学校や園でも、それぞれの年代で何を教えるのか、そのコンテンツが明確に打ち出されていて、それを知ることができたのは大きな成果である。また、日本の幼児教育では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の1つとして「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」が挙げられているが、その具体を目の当たりにできたと言える。

一方、現状のPrepの課題としては、教科書のような共通の媒体を基本的に使用していないため、その教え方は個々の学校や教員に任せられていて、その裁量の幅がかなりある点である。同じ年代(学年)を担当する教員同士での打ち合わせがかなり綿密になっていないと、習うべきコンテンツが抜けてしまう可能性がある。また、個々の教員の裁量に任されている部分が多いため、抜けていることにも気づかずに進んでしまっている可能性がある。さらに大きな課題としては、素地を養う場面が不十分であるという点である。日本の算数では1~100までの数を小学校1年生で学ぶところ、オーストラリアのPrepでは1~20を学ぶことになっている。授業の様子を見る限り、教師の導きのもとで先取り学習をしているように見受けられた。Prepの年代では、先をあまり急がず、算数で言えば数や形の素地となる体験に特化した学びを徹底するべきではないかと考えた。そのためにも、Neville Simpson 夫妻の提言にもあったように、ベースとなる記述があり、子どもたちが主となって進められるような教科書が作成できないものかと思案している。

#### 5. 終わりに

本研究の現地視察に当たっては、St Gerard Majella Primary, Butterflies Early Learning Centre, St Andrew's Catholic College, 算数教育の実践家であるNeville Simpson夫妻、およびそれらをコーディネートするマーティ潤子様の多大なる協力があったて遂行することができました。また、現職の小学校教員の視点で参加していただいた大阪市立小学校教諭の小西可奈恵先生からの助言、さらに、「たかはし算数」研究所長の高橋秀信様の全面的な参画のもとで、研究を推進していくことができました。皆様方のご理解とご協力で本研究がまとめられたことに、心から感謝致しております。

**執筆分担・役割分担**

第1著者：1, 2, 3, 4, 5, 総括

第2, 3, 4著者：4, 監修

**参考文献**

- ・ 亀岡正睦, 大庭悦子, 徳山友梨(2018). 幼稚園教育における数学的資質・能力の育成に関する研究. 教育実践方法学研究, 第4巻, 第1号.
- ・ 橋本隆公(2018). 「幼保・小の連携」から「幼保小の共有」へのパラダイムの転換. 大阪成蹊大学紀要, 第4号.
- ・ 平野知見, 亀岡正睦(2019). オーストラリアの保育・幼児教育の現状. 京都文教大学心理社会的支援研究, 第10集.